

隨泉寺寺報

平成 25 年 (2013 年) 10 月号 第 518 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代経法要

講師 瀧淵 良孝師

講題 『仏智に照らされて』

■永代経法要 ～縁のある人々のご恩を偲ぶ法要～

『歩んだ道をふり返って確認 だいじょうぶ だいじょうぶ
だってあなたに会えたもの いままでの全てに ありがとう』 澤田直見

不思議な縁で親子兄弟、夫婦となりました。お育てをいただいたご恩、教えていただいたご恩、そのご恩を永代忘れません。自分の人生を振り返りようこそ、ようこそ、出会うことが出来ました。永代経の懇志は、亡くなられた方をご縁にして、お寺が護持され、それによってみ教えが「永代にわたって維持されますように」という願いが、実は永代経懇志を進納する人の本来の願いです。

子孫に美田をのこさずという古語があります。きっと安穩に暮らせるような財産を受け継いだわけではなく、自らの力で人生を切り開いた人の言葉であろうと思います。形あるものは本当の遺産ではない、心を受け継ぎ、生き方から学べという戒めでしょうか。先人の後を生きるわたしが問われるのでしょうか。

永代経は先祖が私に残してくれた尊いみ教えを伝える法座です。

10月の法座予定

- 10月 2日 …… 本部役員会
- 10月 13日 …… 掃除 平原西
- 10月 14日 昼席午後1時より …… 秋季永代経法要
- 10月 14日 夜席午後7時より …… 出張法座 平原西集会所
- 10月 15日 朝席午前10時より …… 若い婦人の集い おとき
- 10月 15日 昼席午後1時より …… 秋季永代経法要
- 11月 2日 午後5時より …… 門信徒会本部役員会

☆ 研修旅行

研修旅行に行っていました。今回の参加者は34名と少し少なかったのですが、募集期間が短くて、なかなかお知らせが出来なかったからなのかもしれません。9月の25日午前7時半に隨泉寺の前の駐車場-のところで集合しました。瀬野大橋から15名乗ってこられ、バスは大型のロングボディ



なのでゆったりと座れました。最初の行先は庄原 尾引の妙延寺(尾野義宗住職)です。妙延寺の歴史や、老人ホームを開設されるいきさつなどを聞かせていただき、地域の中で妙延寺が地域福祉の中心的な活動をされていることに感動いたしました。妙延寺は少し遠縁になるお寺で、ビハーラ活動



も熱心な、私が尊敬しているご住職です。

吉舎の明覚寺は西本願寺の元宗務総長 不二川公勝さんのお寺です。私も住職になったとき帰敬式を執行していただくときに、お世話になりました。不二川公勝さんは今は東京築地本願寺の輪番をしておられるので、お留守でしたが、副住職さんからお寺の歴史などを説明していただきました。これから本堂を移築されるそうで、完



成したらまた見たいものです。

吉舎から世羅に行く途中で彼岸花の群生地が咲き誇っているということで見に行きました。昼食は世羅のワイナリーに行き、ワインの試飲で飲みすぎました。



河内の立栄寺はやはり本願寺の宗務総長を歴任された武野以徳さんのお寺で、現在



も息子さんの公昭さんが本願寺の宗会議員をされています。私も若院もまた若坊守もお世話になりました。ちょうど総長さんが居られて、いろいろ説明していただきました。本願寺のお厨子をお預かりしておられ、びっくりしました。そういえば本願寺新法に記事が載っていました。素晴らしいもの



でわざわざ内陣に入れてくださり、3年前までこの中に親鸞聖人の御真影様が安置されておられたと思うと、感激いたしました。

☆ 若い婦人の集い 10月15日午前10時～

10月15日朝席は若い婦人の集いです。とはいっても昔若かった人もどうぞお参りください。出来れば若い人を誘ってお参りください。本堂が若い人や、昔若かった人でいっぱいになれば、うれしいなと思っています。誘い合わせてお参りください。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 大木 節子殿 故 大木 ハル子様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 大木 節子殿 故 大木 ハル子様 香典返しとして

「人生は長さじゃない深さです幅です」 10月

(金子大栄)

現代社会の特色は、この世に強い関心が向けられるようになったことでしょう。ところが、現実には、人生の豊かさ、深さを考えるよりも、体の若さ、健康、長生きを大事にすることになりました。それも、意味はありますが、それが全部ではありません。今の日本では、歳を取ることも大変な仕事です。

親鸞聖人は平生業成の教えを説かれました。臨終が来てから、あわてて阿弥陀如来さまにすがるのはなく、臨終ではなくて平生すなわち、今、ここに、南無阿弥陀仏をいただいて、生死の問題を解決し、阿弥陀如来さまの光の中に、共に、歩む道を築き、育ててゆくことです。

「これから何を目指すか、何を依り所に生きるか」をおろそかにしたままでは、せっかく長生きしても、世話をされる方も、する方も、つらく、悲惨になります。若さ・健康を誇ると、誰かを傷つけるかもしれません。お念佛をいただくものとして、個人の生き方を考えるとともに、世の中の仕組みにも、工夫をこらしていきたいものです。

浄土真宗本願寺派門主 大谷光真著 「あけぼのすぎ」一 浄土真宗一口法話一

母に、ねぎらいと感謝を込めて

明るくて気さくな母でした。早くに父が亡くなって、仕立てや編み物の仕事を受け、女手ひとつで五人の子を育ててくれました。

生計を立てるために始めたスナック喫茶は、母の生きがいとなり、83才まで営みま

した。
音楽が好きで カラオケや民謡 大正琴などに親しんだ母。和服が似合う母の 在りし日の凛とした姿を思い出します。母は 平成25年8月13日95才の生涯を閉じました。この4月に転倒して入院するまでは、身の回りのことを何でもこなしておりました。亡くなる数日前、うわごとで口にした「盆が過ぎたら店をあげにゃあ。飯が食われんけえ」の言葉が、せつなく胸に残ります。

家族のために働き続けた母に心からの感謝を伝え 大好きな花をたくさん添えて見送ります。「お母さん、長い間ありがとうございました」

合掌

林 恭匡

法名 釋 明龍 俗名 林龍子 平成25年8月13日往生 行年 95歳



「天高く、馬肥ゆる秋」

親鸞聖人は、自らが凡夫であることを深く自覚されました。次のご和讃には、その気持ちが切実に表されています。

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身に 清浄の心もさらになし
(『正像末和讃』同六一七真)

私たちは、何か絶対的な存在に出遇わないと、自分の愚かさを自覚できません。如来の本願に出遇った時、ようやくわが身が煩惱でまなこをさえられた凡夫であることに気づかされるのです。

現代は、親鸞聖人の時代よりも、私たちが素直に自分の愚かさに気づくことは、難しくなっているかもしれません。近代以降の科学技術の発展が、あまりにもめざましかったため、いつしか人間は傲慢になり、尊大になってしまったからです。

万物の霊長として自然を征服し、まるで地球の主となったかのように振る舞っているのが今の人類でしょう。

確かにわずか百年前と比較しても、物は豊富になり、私たちの暮らしもずいぶん便利で快適になりました。それは近代社会が人間の欲望を肯定し、欲しいものは何でも商品として提供されるような仕組みを作り上げたからです。商品を多く売るために、一層欲望が刺激されます。

そうした結 果、人間が欲望を制御できなくなった弊害が、さまざまな形で噴き出しています。たとえば、経済的に豊かな国々で蔓延している「生活習慣病」もその一つでしょう。これらの病因は、体質的なものを除くと喫煙、飲酒、過食などの欲望をコントロールできないその人自身にあるといわれます。

十月、「天高く馬肥ゆる秋」といわれる季節になりました。もちろん肥えるのは、馬だけではありません。若い女性にとっては（最近男性も？）、自分のスタイルを保つことが大きな関心事です。そのため、多数の人がダイエットに励んでいます。もう、ダイエットは一大産業といえます。食品メーカー、製薬会社、スポーツクラブ、エステ、クリニック……と想像を超える多数の人たちが、「人を痩せさせる」商品で糧を得ています。おいしい物をたくさん食べたい、飲みたいというのは煩惱の一つですが、それを克服するのがいかに難しいか。



偉そうな顔をしていても、私も十年来痩せたいと思っていますが、うまくいきません。結局は一番の問題は、食べ過ぎているのでしょう。過食さえもなかなか制御できないのが私なのです。

まさに、七百数十年前に親鸞聖人が次のようにおっしゃっている りです。「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで とどまらず、きえず、たえず……。 (『一念多念証文』註釈版聖典六九三真)